１．オリエンテーション、導入――聖書と聖書学・考古学
２～７．旧約聖書――宗教史的背景、創造、契約、王権、預言、知恵
８．新約聖書１――新約聖書学　９．新約聖書２――神の国
10．新約聖書３――イエスの譬え　11．新約聖書４――富
12．新約聖書５――国家　7/8　13．新約聖書６――グノーシス
14．受講者による研究発表１　7/15　15．受講者による研究発表２　7/22
16．フィードバック

＜前回＞新約聖書４――富

（１）宗教と経済、問いの所在

信仰は単なる内面の事柄か？　心の問題か？

１．経済は、宗教思想にとって、いわば隠れた問いである。「欲望」という問題。

・近代キリスト教思想の前提　→　宗教の内面化・精神化＝私事化

聖と俗の二分法：宗教と経済を分離する暗黙の思考法

本来の宗教、キリスト教は、御利益宗教ではない。魂・心情の純粋さが宗教の真髄である。

しかし、建前論、宗教の抽象的な議論。

・現実の宗教を批判的に分析する際に、この二分法には、限界がある。

経済・富・欲望は、キリスト教にとって、常に隠れた争点として存在した。

この経済と宗教とのリンクにこそ、宗教の根本的問いがある。

聖書の富者批判、愛の共産制、修道制の成立と展開、宗教改革、土着化など

まず、ここに問題の核心が存在することを認めるところから出発するとどうなるか。

２．経済と環境は切り離せない

・Sallie McFague, "God's Household: Christianity, Economics, and Planetary Living,"

Religions help us from the basic assumptions about what we are and how we should act in the world. Presently, two wolrdviews with accompanying economic rules for planetary living vie for our loyalty. One is the neoclassical market model with its ideology of greed and its goal of growth: the consumer society. The other is the ecological economic model with its creed of interdependence and its goal of planetary sustainability: the just society. Many Christians, particularly middle-class North Americans, are presently captive to the first model. Christianity should, however, advocate the second model

（２）聖書の宗教と経済との多様な関連性

４．預言者・黙示文学の伝統における富者批判

1)預言者の富者批判・弱者の視点、正義＝神の下の平等

2)黙示文学：富める者の不正はこの世界の悪の支配の徴。神の国ではこの秩序は逆転。

3)富者を批判するイエス

4)初期キリスト教会と愛の共産主義（財産の共有）

５．物質的な豊かさは神の祝福。→　因果応報と核とする慣習的共同体的な知恵！

・Ben Witherington III, *Jesus and Money. A Guide for Times of Financial Crisis*, Brazos Press, 2010）、Sondra Wheeler

７．現代の思想的文脈

富の問題は、キリスト教をその現実性に即して問う場合に避けて通ることができない。特に 1990 年代以降の冷戦後の世界において、キリスト教は様々な対立と紛争に関与するものとしてしばしば批判されてきたが、そこには、経済的要因が深く複雑に絡み合っており、こうした議論に対して有意味な論究を行うには、聖書と経済・富との関係を整理することが必要である。

近年、新自由主義的な経済政策の妥当性への疑いが様々な立場から提起されるようになっている。特に問題は、新自由主義的経済と環境危機との関連性である。

９.「聖書における富の問題に関して、まず確認すべき点は、聖書には富に対する統一見解など存在しないということである。旧約聖書においては、一方に、富を神からの祝福とする考えがあり――知恵文学には、不正な富の獲得は別にして、富自体を肯定的に捉える言葉が散見される――、他方、預言書や黙示文学では、貧富の格差や不正との関連における富あるいは富者への強烈の批判が見られる。新約聖書においても、旧約聖書の富者批判を受け継いだ議論（福音書、ヤコブ書、ヨハネ黙示録）から、富自体よりも富に固執する欲望へと批判の論点を移す議論（パウロ書簡、牧会書簡）まで、様々な見解が存在する。

見解の多様性を認めた上で、聖書全体に関しては次の点が指摘できる。(1)不正義や過剰な欲望と結びつく富は否定される。(2)富あるいは富者についての論評は、共同体（たとえば教会）が置かれた社会的文脈と相関的である。共同体が社会の経済的政治的な権力構造との関わりを深めるについて、富自体への否定的見解は後退する傾向が見られる。」（「富」『キリスト教平和学事典』教文館、2009 年）

（３）イエスの譬えと経済―ぶどう園の労働者―

13. 3)思想性：「神の国の譬え」という視点で何がわかるか。

・最初に雇われた労働者の不満＝聞き手の不満

・イエスの答えに設定しての驚き

社会的慣例（労働時間に比例した賃金）の無視とも見える主人の気前よさ

・神の国とは何か。

神の驚くべき恩恵（一方的な贈与）。神の国に入ることは喜ばしい驚きである。

14. 3)思想から行動（倫理）へ

・聞き手自らの状況についての批判的な反省

神の国の恩恵的性格と制度化の関わり。

神の国は制度の枠組みを超過している（＝気前よさ、開かれた食卓はここに生成する）。しかし、この気前よさは人間社会の中に制度をもたらさないか。

・神の国は、特に社会的弱者にこそ開かれている。神の国の弱者への共感。

公平・正義とは、機械的な平等か。最低限の生活の保証が優先する。

・「最低限度の人間らしい生活を保証する制度」の意義。

（４）パウロの共同体と経済

・Richard A. Horsley, Covenant Economics. A Biblical Vision of Justice for All, Westminster/John Knox Press, 2009.

（５）黙示論と経済

・Barbara R. Rossing, ""River of Life in God's New Jerusalem, An Eschatological Vision for Earth's Future,"

15. ロッシングの問題意識：黙示録を非環境論的であると解釈する（黙示録への懐疑論）のとは別の解釈の可能性、むしろ、ヨハネ黙示録を環境論者でフェミニストの新約聖書学者として積極的に読解することを目指している。「黙示録の目的は人々に強く勧め勇気を与え、神の審判と救済を宣言し、希望と正義のヴィジョンをもたらすことなのである。」(207)

16. そのためにロッシングが注目するのは、黙示録が提示する、バビロンとエルサレムという対照的な二つの都市のヴィジョン、二つの対照的な政治経済学のヴィジョンである。

17. ローマ帝国の「現実化した終末論」（永遠のローマ、ローマの平和）。

ローマ帝国のグローバルな全能性は地中海の海洋交易が支えていた。黙示録は、このローマの全能と永遠性を転倒している。

・バビロンの政治経済学、バビロンの環境破壊。

18. バビロンに対する新しいエルサレム、「もはや海はない」(21:1)

・別の経済的ヴィジョン、新しいエルサレム（生命の都）は環境論的。

・地上における神の家、都市生活のヴィジョン

・贈与的経済（a gift economy）：生命の水をすべての人に値なく飲ませる。

12．新約聖書５――国家

（1）キリスト教と国家

１．単一の国家論を導き出すことはできない。古代：迫害から国教化、敵対から協調
　　キリスト教は事実上、あらゆる形態の政治体制下で存在してきた。

２．国家、教会、神の国の三者関係
　　↓
　アウグスティヌスの『神の国』（岩波文庫）：地の国と神の国の二原理によって、歴史は規定される。国家にも教会にも、これら二つの原理が作用している。

（2）新約聖書の国家論

３．イエス：論争における国家への言及　→　多様な解釈が可能、政教分離？

・マルコ　12:13 さて、人々は、イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした。14 彼らは来て、イエスに言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか。」15 イエスは、彼らの下心を見抜いて言われた。「なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持って来て見せなさい。」16 彼らがそれを持って来ると、イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。彼らが、「皇帝のものです」と言うと、17 イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らは、イエスの答えに驚き入った。

４．ヨハネ黙示録：迫害下の教会　→　国家との敵対関係

・ヨハネ黙示録　13:15 第二の獣は、獣の像に息を吹き込むことを許されて、獣の像がものを言うことさえできるようにし、獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。16 また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての者にその右手か額に刻印を押させた。17 そこで、この刻印のある者でなければ、物を買うことも、売ることもできないようになった。この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である。18 ここに知恵が必要である。賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。そして、数字は六百六十六である。

　14:6 わたしはまた、別の天使が空高く飛ぶのを見た。この天使は、地上に住む人々、あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族に告げ知らせるために、永遠の福音を携えて来て、7 大声で言った。「神を畏れ、その栄光をたたえなさい。神の裁きの時が来たからである。天と地、海と水の源を創造した方を礼拝しなさい。」8 また、別の第二の天使が続いて来て、こう言った。「倒れた。大バビロンが倒れた。怒りを招くみだらな行いのぶどう酒を、諸国の民に飲ませたこの都が。」

５．パウロの意義：市民社会のキリスト教、国教化以降の状況との合致

・ローマ　13:1 人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。2 従って、権威に逆らう者は、神の定めに背くことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。3 実際、支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です。あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう。4 権威者は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者なのです。しかし、もし悪を行えば、恐れなければなりません。権威者はいたずらに剣を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのです。5 だから、怒りを逃れるためだけでなく、良心のためにも、これに従うべきです。6 あなたがたが貢を納めて

いるのもそのためです。権威者は神に仕える者であり、そのことに励んでいるのです。7 すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい。

↓

税金の問題：

（３）ローマ帝国の迫害のキリスト教

犯罪者として処刑されたイエスとその運動の後継者としての初期キリスト教会。
対決は不可避的であったが、それは何をもたらしたのか。

６．迫害下のキリスト教（１～３世紀）：この間にキリスト教の原型が完成した。

７．ユダヤ教から継承したもの：

1) 終末思想：善悪の最終的決着の時・罪の問題の最終的解決＝歴史（創造から終末）の完成　→　神との完全な関係の実現・本来的な人間性、正義の実現

2) 黙示的終末論：宇宙的ヴィジョン→　罪と悪に対する勝利、ハルマゲドン
バビロン捕囚以降の状況・ゾロアスター教の影響
・ヘレニズム的な文化環境への適応、民族宗教の再建
・黙示文学：ダニエル書、エズラ書、ヨハネ黙示録（アポカリプシス）

８．迫害・抵抗文学 → 象徴、暗号
獣 666、「大バビロン、みだらな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」
終末・時の切迫の実感　→　迫害下の教会への励まし（最後まで耐え忍ぶ者は幸いである、命の書）

９．ローマの平和か、神の平和か（二者択一）
ローマの平和（Pax Romana）：政治と経済による上からの支配、そのもとでの秩序＝平和。
・皇帝崇拝：平和は皇帝の恩恵である。神的な皇帝。
・ローマの軍隊による地中海世界の統合＝古い諸国家の滅亡
交通網と法の整備
・経済：貨幣の統一、商品作物の海洋交易による富の集中。
↓
民族的伝統・文化の解体と環境破壊

10. キリスト教はこの対立の中で、ローマの秩序を利用することによって拡大し、ローマとの妥協に至った。

＜聖書＞

ヨハネ黙示論 20 章

1 わたしはまた、一人の天使が、底なしの淵の鍵と大きな鎖とを手にして、天から降って来るのを見た。2 この天使は、悪魔でもサタンでもある、年を経たあの蛇、つまり竜を取り押さえ、千年の間縛っておき、3 底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。その後で、竜はしばらくの間、解放されるはずである。4 わたしはまた、多くの座を見た。その上には座っている者たちがおり、彼らには裁くことが許されていた。わたしはまた、イエスの証しと神の言葉のために、首をはねられた者たちの魂を見た。この者たちは、あの獣もその像も拝まず、額や手に獣の刻印を受けなかった。彼らは生き返って、キリストと共に千年の間統治した。5 その他の死者は、千年たつまで生き返らなかった。これが第一の復活である。6 第一の復活にあずかる者は、幸いな者、聖なる者である。この者たちに対して、第二の死は何の力もない。彼らは神とキリストの祭司となって、千年の間キリストと共に統治する。7 この千年が終わると、サタンはその牢から解放され、8 地上の四方にいる諸国の民、ゴグとマゴグを惑わそうとし

て出て行き、彼らを集めて戦わせようとする。その数は海の砂のように多い。

（４）公認・国教化の意義

11. キリスト教の公認と国教化
313：ミラノ勅令（コンスタンティヌス大帝）
325：ニケア公会議
381：コンスタンティノポリス公会議
392：国教(テオドシウス帝)

12. 政治的秩序と宗教的秩序の相補性
天上の秩序と地上の秩序、天の統一と地の統一（上と下との照応性、照応の論理）
↓
政治神学 cf. 近代的な政教分離

13. 政治的要請としての「正統―異端」論争
宗教的要因との関連性の問題
多様性を保持しつつ、異端との対応で徐々に正統教会へ
・近代日本におけるキリスト教合同問題
・ポスト・プロテスタント時代のキリスト教
ティリッヒ

14. 三位一体論の意義
・国教会＝正統教会の基盤となる教理→その後のキリスト教世界の基礎
・独裁的絶対的な神理解への批判契機（モルトマン)、多様性の保持

（５）国教化の帰結

15. 国家神学・政治神学としてのキリスト教神学
「神学」：キリスト教の発明ではない。古代ギリシャ起源。
ストア哲学の神学区分（アウグスティヌス）：
民衆の神学（神話） 国家の神学（ポリスの国家儀礼） 自然の神学（哲学）
↓
キリスト教による「神学」の変革
キリスト論の意義（芦名定道『自然神学再考』晃洋書房）

16. 「国家の神学」を組み込むことによって、キリスト教神学の成立過程は完了した。
↓
政治神学（シュミット）

17. 絶対平和主義（軍隊の宗教性）から正戦論（アウグスティヌス）へ、そして聖戦論へ。
キリスト教の国教化は、国家に対する教会の関わりについて再考を迫ることになる。
パウロの国家論の意義（宮田光雄）

18. アウグスティヌスの「神の国」論
「四世紀終わりから五世紀初めにかけて、キリスト教は、忍耐から確立へと変遷した。伝統的なローマの祭礼は国の支持を失い、皇帝たちは、キリスト教の神をローマの運命の保証人として頼りにしたのだった。ミラーノの司祭、アンブロシウスはローマ皇帝にユダヤの王という聖書のイメージを適用することによってこれに答えた。ヒッポのアウグスティヌスは、キリスト教徒の支配者による戦争の遂行を正当化した地の国と神の国の相互補完の理論を展開した。」（マーカス、162 頁）
↓
このアウグスティヌスの意図とその後の影響史・解釈史との区別、そして関連。

19. 現代的問題：キリスト教と公共性
国教会体制後の政治的状況で、なおも、正戦論にとどまるのか。
国民国家・民族主義を超えた普遍性の実現を試みるのか。

↓
下からの公共性、ネットワークとしての公共性

＜参考文献＞

１．宮田光雄　『平和の思想史的研究』創文社。
『平和のハトとリヴァイアサン――聖書的象徴と現代政治－』岩波書店。
『非武装国民抵抗の思想』岩波新書。
『国家と宗教――ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』岩波書店。
２．荒井献『イエスとその時代』岩波新書。
３．Ｍ・Ｊ・ボーグ　『イエス・ルネサンス――現代アメリカのイエス研究』教文館。
４．Ｈ・Ｃ・キー　『初期キリスト教の社会学』ヨルダン社。
５．芦名定道・小原克博　『キリスト教と現代――終末思想の歴史的展開』世界思想社。
６．Ｅ・Ｐ・サンダース　『パウロ』教文館。
７．佐竹明　『使徒パウロ　伝道にかけた生涯』、『ヨハネ黙示録　上中下巻』新教出版社。
８．田川建三『キリスト教思想への招待』勁草書房。
９．ピーター・ブラウン『古代末期の世界――ローマ帝国はなぜキリスト教化したか？』刀水書房。
10．ロドニー・スターク『キリスト教とローマ帝国――小さなメシア運動が帝国に広がった理由』新教出版社。
11．Ｊ．ヘルジランド、Ｒ．Ｊ．デイリー、Ｊ．Ｐ．バーンズ『古代のキリスト教徒と軍隊』教文館。
12．R.A.マーカス　『アウグスティヌス神学における歴史と社会』教文館。
13．シュミット　『政治神学』未来社。
14．Ｊ．モルトマン、Ｊ．Ｂ．メッツ　『政治的宗教と政治的神学』新教出版社。
15．深井智朗　『政治神学再考――プロテスタンティズムの課題としての政治神学』聖学院大学出版会。
16．アガンベン『ホモ・サケル――主権権力と剥き出しの生』以文社。
『王国と栄光――オイコノミアと統治の神学的系譜学のために』青土社。